生活科・総合の時間研究委員会

1　研究テーマ

生活科・総合的な学習の時間において、

学ぶ喜びを味わえる授業づくりはどうあったらよいか。

2　研究内容（研究課題）

研究授業	
期　日	11月19日（水）
会場校	旭ヶ丘小学校
単元名	「あきのどんぐりまつり」（生活科）
学　年	1学年
授業者	藤澤由紀子先生

昨年度の研究で明らかになってきた

(1)　子どもが自ら関わりたくなるための素材、題材のあり方

(2)　生活科における学ぶ喜び

(3)　子どもが学ぶ喜びを味わうための支援、評価

を実際の授業にどのように生かしていくかを考え、進めてきた。

3　研究の成果

(1)　指導の実際

本時は保育園の年長さんを招待したどんぐりまつりに向けて、来てくれる相手のことを考えながら出したいお店のグループごとに製作したり、試したりして準備をしていく時間だった。どんぐりつりのために黙々といくつも釣り竿を作る子どもたち、よく回るどんぐりごまができるように、外部講師の先生の話を集中して聞き、先生の手元を真剣に見つめる子どもたち、自分たちの作ったボーリングを投げる位置を変えながら何回も試す子どもたち等、子どもたちは友だちとアイデアを出し合ったり、協力したりしながら自分たちの活動にはまりこんで取り組んでいた。

(2)　この事例から明らかになったこと

〈素材、題材について〉

授業学級は年度当初から、生活科の中で季節を感じる体験を大切にしながら折々の活動の中で少しずつ仲間意識を深めたり、他の人との関わりを広げたりしてきた。本単元は、子どもが拾ってきた落ち葉を「秋１号」と名付け、みんなで学校周辺でいろんな秋を見つけて集める身近な秋探しからはじまり、臥竜公園でのどんぐり拾いや収穫活動を通して「どんぐりがたくさんとれたおいわいをしたい」という子どもの願いから立ち上がってきた。日々の生活の中であまり気に留めなかったものが、生活

科の体験を通して自分にとってかけがえのないものになり、「どんぐりまつり」という活動につながっていった。思いを大事にした活動を続けてきたことにより、子どもたちは夢中になって取り組めたと考える。

〈生活科における学ぶ喜びについて〉

昨年度の研究で「生活科での学ぶ喜び」とは

① 自分なりの思いや願いをもち、右や体をほぐして対象に自らかかわることができる。

② 自分なりの考えで関わったり、工夫したりして、表現することができる。

③ 活動を通して、知的な気付きがある。

④ 必然的に生まれる身近な人や社会、自然とのかかわりを通して、自他のよさに気付くことができる。

ことであると教えていただいた。

黙々といくつも釣り竿を作る姿、外部講師の先生の話を集中して聞き、先生の手元を真剣に見つめる姿、自分たちの作ったボーリングを投げる位置を変えながら何回も試す姿等、一時間の中で見られた一年生の子どもたちの活動の姿は、上記の「学ぶ喜び」の具体の姿であったと考える。指導者の先生からも活動にはまり込む体験の重要性をご指導いただいた。そのための場の設定をどう教師が考えていけばいいか、どこでどんな学ぶ喜びを子どもが味わうことができるのかをイメージしながら授業を構想していく大切さについて学ぶことができた。

〈支援、評価について〉

昨年度教えていただいた「評価の観点」を指導案の座席表に位置付けた。「こんな姿があればいいな」と子どもの具体の姿を考えておくことにより、教師の的確な子どもへの声掛け等支援のしやすさにつながっていた。ただし、「こうならなければいけない」ものではないので、子どものその時の思いを大事にし必要以上に縛られないようにすることを大事に考えたい。

本時において、外部講師に入っていただき、どんぐりゴマづくりのお手伝いやおでんの作り方を教えてもらったことは人とのかかわりという点でも大きな支援であった。教師自身の支援でも同じであるが、どこまでを子ども自身がやり、どこを大人が手を出すのかを見通しておくことが大事であることも感じた。

指導者の先生から「先生の指示が減っていっても子どもが動けるようになる」のが生活科で求めたい姿であると教えていただいた。的確な支援と評価の積み重ねにより子どもたちが自信を持って学びを自分たちで作っていけるようになるのだと考える。

4 来年度への課題

(1) 子どもたちが地域のよさを感じながらかかわりを深めていくことができる地域素材の開発。

(2) 子どもたちの学ぶ喜びをより高めていくことができる支援のあり方。

(3) 子どもたちの具体的な姿から、評価の視点を一層妥当性のあるものにしていくこと。